

今までのこと，これからのこと ためらう若駒を一川端まで導くために

いわゆる激動の時代、八十年代が始まった。そして学校生活としては、一年の終わりが近づいた。

ふり返ってみて、本校学生の読書生活や図書館利用は、この年度、向上したか、同時にわれわれ図書館関係者は、どの程度の貢献ができたか、静かに評価し、また自問自答すべき時期になった。

このことに関しては、既に35号に、「1・2年生の夏休みの読書」を紹介し、また9月に、図書帯出票を整備させるため学生図書委員による仲介を試みたりした。

ところで最近のデーターによれば

1. 統計は、1月10日～2月1日の平日入館者数が1日平均179人、貸出冊数が1日平均47冊であることを示す。
2. 2月1日現在、帯出票を持たない者つまり、全く館外貸出しを受けない者は153名、全学生の約20%に達する。(2年50、3年17、4年26、5年60名)(M32、E29、C35、土57名)

読書や図書館利用は、結局その基盤が学習にあり、さらに又、その前提が学校生活にある以上、読書生活の向上は、深い処で学校生活全般の態度の向上に発する。

去る1月27日の新聞は、大阪市立大学で「教官の見た学生像」のアンケートを紹介している。その意見に曰く、「学生は実利的な教科だけに興味があり、単位が目的」、「ノルマを与えないとやらないし、ノルマ以上はやらない」、「質問や授業への注文、揚げ足取りもなくなった」(更にはまた「カンニング技術が高度になっている」などまで)

幸いなことに、わが国立福島高専には当てはまりそうにもないが、「他山の石」にはなりそうである。

もっとも、「冬休みといってもたったの19日しかないので、バイトでもやろうかと思ったが、あまり気が乗らなかった。それで毎日だらだらした生活を続けた。マンガ本読みとテレビばかり。いい加減あきあきする。勉強はいいのかと親に言われるが、休みぐらいいは静かにしてくれと言いつつしているありさまだ」といった風な感想文をものする低学年学生も本校に相当数いるのも事実ではある。

遠い目的を見通して近い目標を定め、そのための計

画を立てて、自主的に、積極的に学校生活の一日一日を生きる、という態度ができていなければ、若い若い青春に、「退屈」ということはないはずだ。

そこに、おのずから、読むべき時に、読むべき本を手にはせずにはいられなくなる。

能力・学力はかなり高く、気力・根性の点がいまひとつという本校学生(のある部分)に対して、読書欲を刺戟し、進んで図書館を活用させるにはどうしたらよいか、われわれの負う大きな課題で、次年度のための答案の下書きを試みた。

1. 良書に対する関心を高める。
2. 図書館に近づきやすくする。
3. 特に書庫の本を利用しやすくする。

より具体的には、1のために、全教官の御援助を得て、必読書を強く提示すること。2のために、特に館職員の工夫と学生図書委員の協力を求めること。また3のために、校長先生の御指示もあり、帯出手続きの簡素・能率化を考えてゆくこと。

実態は、のどのかわきを自覚していない若駒どもを、首に綱をつけてでも、豊かな水の川ばたまで連れて行ってやらなくてはならぬように思える。

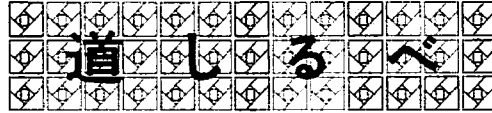
どうかこの願いに対して、学生諸君の深い理解と強い反応とを望みたいのである。

このささやかなパンフレットも、号を重ねてはや40回になろうとする。作者・読む人の双方のために、いささか「初心に返」って考えてみよう。

去る46年6月26日付、第1号の巻頭に芋川先生が示されたことば、「ビブリア発刊にあたって」を引用させてもらうと、

「高専生として求められている知的水準を示し、またその水準へ到達するための手がかりを与えよう………生々とした未来を予知させる知的『饗宴』の場を作りだしてゆきたい」

この明らかな目標に向かって、もっと内容を豊かにするべく、図書委員・図書館職員・学生図書委員が努力するのももちろん、校内各位の参加協力を、来年度はいっそう強く広くお願いしたい。(館長 池田 豊)



見えざる作業

土木工学科教官 山ノ内正司

ふとこんな事を考えてみた。質点の円運動における遠心力を、思い切って、人間の他者への働きかけ—社会活動、人間関係 etc —に置き換えてみるならば、平衡状態にある求心力とは一体何か？ 「私」の内奥に向かう、自己省察や成長の欲望とも言うべきベクトルにたとえられるのではないだろうか。他者が知るすべもない、見えざる作業である。しなかったといって卒業できない訳でもなく、誰かに非難される訳でもない。また、したからといって何か賞をもらえる訳でもない。しかし、いつでも、しなければならぬという飢餓感がつきまわっている。

私にとっての読書とは、この見えざる作業の一部であり、特に最近ではそうありたいと思いつつ本を選び読んでいます。(多くの場合、本の選択と読むという行為の間には、かなりの時間的なズレがあるが……)

とは言うものの、高専時代は、これといった世界的名著を読んだと人前で言える程、読書好きではなかった。今でも印象深く残っている作家といえば、柴田翔(されどわれらが日々、鳥の影、われら戦友)、福永武彦(死の鳥、忘却の河、草の花)、安部公房(他人の顔、砂の女、燃えつきた地図)などである。なぜ、これらの作家を選んだのか、今にして思えば、「私」の内奥を投影できるものであったからだろう。また、それが必要条件だった。今こうして書名を書いているだけで、二十歳前の、何かを求めているのにそれがわからない焦燥感や不安定感などが、当時の生活と共に、色彩豊かによみがえってくる。私にとってかけがえのない財産である。

話は変わるが、大学時代、教養部で最も感銘を受けた講義の中に、心理学がある。テーマは「深層心理学」であった。文学部の実験心理学専攻の学生(自称、主流)に言わせると、ユングやフロイトに代表される深層心理学は、心理学の学問体系の中では亜流のそのまた亜流、ということらしいが、私にとっては新鮮な世界そのものであり、学問体系の位置付けなどはどうでもよかった。その印象が忘れられず、ユング心理学を

読み出した。入門書はたくさん出版されているが、ユングの許で学んだ河合隼雄の「ユング心理学入門」(培風館)が恰好の書であろう。人間の意識構造の中で、大部分を無意識層が占め、意識層は氷山の一角として現われているにすぎない。これは周知のことであるが、ユング派の特徴は、通常の個別的な個人的無意識層につき抜け、普遍的無意識層に達したことである。

ユングが、1人の分裂病者の妄想を調べたところ、偶然にもそれはギリシャ語で書かれた神話の内容と一致した。勿論、その患者はギリシャ語は読めない。この奇妙な現象をたんなる偶然とは考えずに、真剣にとりあげて研究した結果、時空の壁を越えた普遍的無意識層を結論するに至った。

神話やおとぎ話、未開人の心などと、現代人の無意識層との共通性を興味深く示してくれる。

最近読んだ本でおもしろかったのが、「われとわれわれ」(小原信著、中公新書)である。サルトル、マルクス、宮沢賢治、ドストエフスキーなどの名作を通して、単数形の「われ」と複数形の「われわれ」、をわかりやすく展開し、連帯のあり方を示唆してくれるものであった。著者は、キルケゴールの研究者である。従って「われ」につきまとう孤独とは、人間が生を営んでいく上での出発点という意味の孤独であり、孤立ではない。「われ」と「われわれ」を対立するものとしてとらえるのではなく、また、「われわれ」の中に「われ」を埋没させるのではなく、「われ」は「われわれ」であるという意識の回復が、新しい連帯の可能性であると結論づけている。あわせて、同著の「孤独と連帯」(中公新書)、「現代の病根」(PHP研究所)も読んでみるとおもしろい。

近頃、小説とは全く疎遠になっている。岩波新書、中公新書、潮新書と、人文科学系の新書だらけである。各々の専門が、数学や物理学に基礎づけられ、枝葉のようにのびた工学の分野と異なり(最近では、境界領域の研究が盛んらしいが…)、門外漢の私にとって、人文系の分野は、入口があらゆる所にいくつもあり、そのくせ、廊下が全く見あたらない建物の様な印象を受ける。その中で様々な問題が混沌としているようだ。致命的なことに、方法論を全く知らない。しかし幸いなことに、自分が人間であるということが残された、ただ一つの手掛りである。

アーベルとガロワ

一般教科教官 亀井 宣男

数学史の上で大変印象に残る数学者にアーベルとガロワがいます。

アーベルは1802年、ノルウェーの貧しい牧師の9人兄弟の長男として生まれ、早くからその数学的才能を注目され、周囲の人達の援助もあって、国の留学生としてパリに留学する幸運に恵まれました。

しかしパリでの生活は苦しく、良い仕事はしていたのですが、それが適当な地位に結びつく訳でもなく貧困に苦しんでいました。そんな中で「五次以上の代数方程式の非可解性について」というアーベルの自信作をパリ学士院に提出し、これが認められれば、数学者として世に出られ、それなりの地位も得られ生活も安定して長年の生活苦からも逃れて研究に没頭できるだろうと大変期待したのですが、その論文は紛失されてしまい結局はうやむやになってしまいました。

そのうち、いつまでも留学を続けるわけにもいかず、心待ちにしていた学士院からの返事は得られないまま帰国することになりましたが、まもなく貧困と戦いながらの無理がたたって結核にたおれて25才で死んでしまいます。

もう1人のガロワは1811年、フランスに生まれ、工芸大学の受験に二度失敗して師範大学に入りましたが、そこもすぐに退校になってしまいます。

ガロワは異常に自尊心が強く、受験に失敗したのも、できが悪かったからではなく、問題があまり易しすぎて試験官が自分をみくびっている、と腹を立てて試験途中で帰って来てしまったからだといえます。

そのうち、フランス革命前の政情不安な時代ですから、政治運動にかかわりを持つようになり、警察側の陰謀だという説もありますが、よく分らない理由により、決闘をするはめになってたおれてしまいます。享年わずか20才でした。

ガロワの業績は決闘の前夜、死を覚悟して弟・友人にあてて書いた遺書の形で残されたものですが、省略が多く難解であったのと、あまりに時代を超越していたためか長い間見すてられていましたが、約50年後にそれを解読し、その重要性を理解する人が現われ、ようやく世間に知られるようになりました。

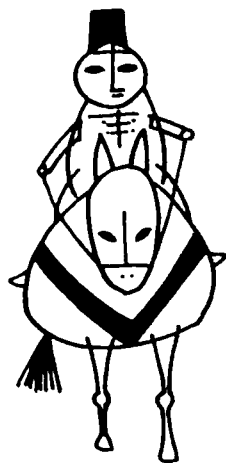
この2人とも天才というにふさわしい素質をもって生まれ、そして非常な努力もしながら、その才能を十分に開花するまもなく若くして死んでしまっています。

「神々の愛でし死者は夭折す」ということでしょうかアーベルは運命にじっと耐え、その中でもがき苦しみながらなんとか脱出しようと懸命に努力しますが、病気にたおれてしまい、一方ガロワは狂気ともいえる高慢さと傲慢とで運命にたち向かい咆哮しますが、決闘にたおれてしまいます。

2人の残されたわずかな結果だけでも近代数学の出发点となるに十分なのですから、もし天寿をまっとうしていたら確実に数学史は書き換えられていたろうと思われ、もっと良い研究条件のもとで存分に才能を発揮したら、どうなったであろうかと残念に思われます。これら大先達がどのような生活をし、どのような状態で何を考えて勉強していたのかを覗いてみるのも、おもしろいと思います。これら大天才でさえ、たゆまず猛烈な勉強を続けていたということは、我々凡人はなおさらと思われ、まだまだ努力の余地ありと勇気づけられます。

最後にアーベルとガロワに関する本をいくつか挙げておきます。

高木貞治 「近世数学史談」共立出版
L.インフェルト 「ガロワの生涯」日本評論社
O.オア 「アーベルの生涯」東京図書
E. T. ベル 「数学を作った人々」東京図書



下級生に薦める

匠の時代

(内橋 克人・サンケイ出版)

5M 鈴木 基之

本を読むきっかけは色々ありますが、私が本書を読んだのは担任の高橋先生に勧められたからでした。この一冊は私に技術者として大切な事は何か、必要な物は何かということを教えてくれたと思います。

この本は四つの章から成っていますが、初めの三つの章で、三菱電機・小西六・東レの三社とその製品のいくつかを挙げ、各企業の最先端で活躍する開発技術者が、それらの製品を世に送り出すまでを描いています。そして最後の章で、先駆者の条件、としてまとめています。

家電製品やカメラなど、直接消費者に結びつく分野における各企業間の競争は、競争というより戦争という言葉が相応しいほど激しいものです。如何に他を出し抜き、競争相手に勝つか。まさに弱肉強食の世界であるわけです。製品を造る場合、全く新しい構想に基づく場合と、これまでの延長線上において造る場合とがあると思いますが、この様な状態の中で生き抜くためには前者でなければなりません。つまり先駆者でなければならないのです。

この本に登場する技術者は、皆先駆者であり、そしてどこかに匠の臭いを残す男達でした。

三菱電機のクリーンヒータ・ふとん乾燥器、小西六の自動焦点カメラ、東レの人工皮革などは、これまでに市場に現われたことのない全く新しい物でした。これらを生み出すまでの道のりは並々ならぬものだったと思いますが、そのことによって、彼らは他に一步も二歩もリードしたわけです。

何が彼ら先駆者ならしめたか。

それは、食うか食われるかという特殊条件下であったこともありますが、何よりも、物を創り出すことに対する彼らの執念でした。

彼らは最初から血統書付きのサラブレッドではなかった。彼らの、何かを創ろうとする意志が、努力と工夫を重ねさせ、時に失敗し、時には偶然を生み、そして多くの協力があって、最後に成功を生んだのです。

技術者として必要なものは、先を見通す目、広い意

味でのヤル気、そして行動力。大切な事はまず人間であること。忘れてならないのは、仕事は決してひとりでは出来ない、多くの人の協力によって始めて出来るということ。以上は、自分では知っていたつもりでしたが、本を読んで改めて教えられたことです。あと二か月で学窓を巣立つ私達にとっては貴重な教訓であると思います。

最後に、現代の私達を支えているもの、そして、人類をここまで発達させ、夢を夢でなく現実としたもの、それは、科学技術の力です。しかし、科学は、自然や人類に対して消極的な意味しか持たないのではないかと、それを利用して、積極的に自然や人間に働きかけて来たのは技術ではないかと思えます。技術者ではないかと思えます。ですから、私は、技術者としての誇りと使命感をもって、仕事に取り組んで行きたいと思えます。

原発死

(松本 直治・潮出版)

5M 渡辺 喜久

石油代替エネルギーの主役とされる原子力発電、しかしその安全性に関しては賛否両論が激しく戦われています。私は、原発は次期エネルギーとして必要不可欠のものであると信じておりました。この本は、そんな中で原発に勤める一人息子をガンで失った父親の手記として書かれています。

ある日、息子の病気がガンであることがわかり衝撃的絶望感をうける父、息子の病気が放射線被曝によるものという疑いを持ち、悲しみが怒りに変わり発ガンの原因を追求する。しかし発ガンと放射線被曝の因果関係の立証は、科学的にも医学的にも困難ということと、被曝量は許容量内ということで会社は門前払い同様の扱いしかしません。会社側ではいちいちこんなことに係わりあっては仕事にならないのかもしれませんが、原発労働者の発ガン率が高いというデータもあるのだから被曝と発ガンとは何らかの関係があると考えるのが当然でしょう。しかも、被曝許容量というものが何ら根拠のない、『この程度なら人体に支障はないだろう』というものであるという。いった

い、こんなことでよいのだろうかと著者でなくとも憤りを感じずにはいられません。さらに、例のスリーマイル島での原発事故後、アメリカでは許容量を厳しくしたにもかかわらずわが国では、国際的に認められたものではないという立場をとっている。原発に関する技術の多くをアメリカに依存しているのにこれは誰が考えてもおかしきではないでしょうか。確かに、これは政治的判断を要するものかもしれません。しかしよく考えてみるとこのような許容量といったものが政治に左右されるということも不思議な話です。政治的なことは除外するとして、専門家としてはあくまでも危険が予想されるなら、その対応策を立てて危険を回避することが使命でしょう。一般の人々にとって、専門的知識が要求されることに関してはその道の専門家の判断を仰ぐしか方法はないのです。素人としては専門家が安全であると言えば安全なのだと思えるしかないので。このとき専門家の見解に偽りがあったのではそれこそたいへんなこととなってしまいます。今の場合、会社は専門家であり、著者は素人です。会社の態度は、素人は何もわからないのだから黙っているという感じがします。さらに原発からの放射線漏れは「故障」であって「事故」ではないと言う。表現の違いだけで放射線が漏れたという事実は変わりはないのです。素人にもごまかし抜きで十分納得させることも専門家としての使命でしょう。私達は卒業後このような専門家という立場に立たされることになるでしょうが、使命を果たせるきびしさが必要であると思います。目先の利益にとらわれない絶対的真理を追求するきびしさが必要であると思います。

この本を読み終えて「原発開発は慎重にすべきである」と考えたが現実のエネルギー状況を考えるとき、「やはり原発は必要である」という考えになってしまいます。私も、著者の言う科学という魔物にとりつかれたひとりなのではないでしょうか。

生命の恋人たち

(王島 勉・若木書房)

5 C 白土 芳江

所謂、名著と呼ばれる作品は、遅かれ早かれ誰もがひもとものであると思うし、専門書は各人、仕事の関係上、目を通すものであると思うので、一番身近な問題でありながら、腰を落ちつけて考えることの少ないであろうと思われる「愛」というものの考え方を哲

学的に意味付けした本を紹介する。

以下述べることは、序論に過ぎないが、それでも十分に考える余地があることを認めない訳にはいかない。

我々は、時折、新聞紙上に、愛=死、死=愛という方程式を信じ、実行している人たちの事を目に留めることがある。当人たちは死によって愛を純化しようとしているのであり、第三者の目には、非常に感動的に写るかもしれない。しかし、果して、生命の存在によって純化される愛はないのか。愛を完成させる死以上に、本当の愛を花開かせる生命活動はないのかという疑問を生ずる。

また、日頃接している映画や小説に「愛のむなしさ」「愛の残酷さ」というテーマを取り上げているのが非常に多い。

たとえば、ツルゲーネフの「初恋」。ふんわりムーディーに描かれているので、誰でもそのムードに酔いがちだが、考えてみると随分残酷な話である。主人公の少年の初恋は、からかい半分の遊び相手として扱われたに過ぎず、少女の恋は彼の初恋を踏みこみに成り立った。しかもこの場合、少女の本当の恋人とは少年の父の父親だった。

また、たとえば、トルストイの「戦争と平和」。これは主テーマが題名に端的に示されていて、「愛」は添え物のようにしか取りあげられていない。しかし、その為に、却って愛の本質が鋭く描かれている。アンドレイと妻の愛。妻の死後間もなく、ナターシャとの出会い。続いて戦場におけるアンドレイの死後、アンドレイの親友のピエールとの愛。アンドレイは高い人格をもった典型的なロシア貴族であったし、ピエールは、亡き親友の恋人を奪おうなどという卑劣な男ではなく、まれに見るような純粋な心を持った優しい男性である。二人の愛はさわやかで深いものがあった。ナターシャといえば、妖精のような可憐さに満ちた純粋な少女であった。これらの経過は、広大なロシアの大地と様々なエピソードを背景に淡々と描かれるため、読むほうでは素直に受け入れられるが、トルストイがここで描きたかったのは、やはり「愛」そのものの中に潜む残酷さだったのではないだろうか。「アンナ・カレニーナ」も、それを直接的に描いたものだろう。そして、もう一つ、フランソワーズ・サガンの「悲しみよこんにちは」。この中には現代的でカッコいい、しかしけだるい倦怠感しかない。サガンは、人間の愛のむなしさ、残酷さを当然のこととして描き、「愛」なんてせいぜいイタズラにすぎない、と訴えているように思われる。愛についての絶望しか感じられないのである。逆に、ジュール・ロマンの「プシケ」は高く

充実した愛の歓喜を描いて、もう一つの極限を示したといえるが、「プシケ」は、飽くまで美しい愛の神話である。

西欧の知性が、ギリギリまで問いつめた「愛とは何か」の答えは、結局のところ、ギリシャ彫刻のように優雅で美しいが、つまりは廃虚である。

我々は、一冊の本を手にして、感動はするものの、なかなか、作者の追求したものは何であるかを考えるには到らない。到らない為に、作品の影響を直接受けてしまうことが多い。我々は、果して、「人生とは」「愛とは」こんなものさと言いきってしまっているのだろうか。これ以上何も追求しないで終ってしまっているのだろうか。

彼は、この後、多くの事例を、続いてキリスト教と仏教で説くところの「愛」を比較検討している。勿論この結論は、彼自身の判断にすぎない訳で、正誤を明らかにする点ではないと考えるし、結論を重んじて、その結論に至るまでの経過を無視されるのも意に反するので、ここには記さないことにする。

この本を紹介した理由は、一つのことを追求する態度を学びとってほしいと思ったからである。一日や二日で結論付けられるものではない。一年で求められたら、早い方かもしれない。時間がかかるということはそれだけ、価値のあることだからである。誰もが、必ず考えるであろう、「人生とは何か」「何の為に生きるのか」など大きな問題にぶつかったときに、たとえ明確な結論が得られなくとも、真剣に立ち向かってほしいと思う。

私がこれを読んだのは、二年の初めで、これらの疑問を持っていた時期だった。これをきっかけに仏教の本を読むようになった。一方、教会にも講義を開くために数か月通った。自分は、自分なりに問題解決に努力したつもりだ。

この本が、ただ一人にでもいい、何らかの役に立てばうれしい。

読書嫌いのキミへ！

5土 梶原 明

読書。ありふれた言葉だが、妙に気嫌いする人が少なくない。現在まで、教科書以外の本は全く読んだことがないなどという人もいるようである。

諸先生方は、古典を読みなさいとか、著名な文学小

説を読みなさいとか、外国の名作を読みなさいなどと、本に関しての教師らしいアドバイスをして下さる。そのような本は確かに良いから今まで残っているのであり、間違ったアドバイスではないと思う。しかし、私が読書つまり本を勧めるとしたら、そんな事は言わない。読書とは、好きな時に、好きな本を、菓子でもつまみながら、ジュースでも飲みながら、また音楽でも聞きながら読み、あきて疲れたら休み、興味を覚えたら一晩中かかっても読破する。このような気楽なものでいいのではと思う。

本校は、図書館も立派であるし、蔵書も多い。しかし、その内容はと言うと、文学の割合が極めて低く、あっても個人全集がほとんどのようである。まるで、ガチガチの文学少年養成図書館である。私たちがよく本屋で見かけるような単行本のたぐいは少なく、文庫本など学校創立当時のものと思われるようなものしか置いていない。普通の学校に比べ幅広い年令が在籍する本校に、あのような片寄ったジャンルの本だけで良いのであろうか。もう少し柔軟な姿勢で臨んでいただきたいものだ。

また、本校の学生の気質から見てもそれは言えると思う。工業系の学校であるため、文科系には弱い。それは仕方のないことであり、そのために本に親しむよう呼びかけるのにはうなづける。しかし、その後が良くない。本は古典や有名な日本及び外国文学、その上哲学・宗教などがよいから読みなさい。などと言われたら本に親しもうとしても親しめない。逆に離れるばかりである。

良書を多く読みなさい。と言われても何が良書で、何が悪書かは判断し難い。他人にはつまらないばかりの本であっても、自分にすれば、大変な感動を受けた本であるかもしれない。一般的に良書とは、古典のように長い年月を経て未だ存在価値が認められているものや、現代の日本や外国の著名な作品であろうか。それにしても悪書とは何ぞや。読んで害になる本だろうか、しかしそのような本は別にないと思うのだが。

どこの本屋に行っても非常に多くの本が、所狭しと並べられている。本屋だから本があってあたり前だが実にさまざまな種類の本がある。趣味から実益、入門書から専門書などなど多種多様である。坊主憎けりゃけさまで憎いと言うが、本の嫌いな人は、本屋まで嫌うかもしれない。本屋にいると頭が痛くなるなどという話も聞いたことがある。けれど私は、街での暇つぶしに本屋に入ることを勧めたい。本屋に入り、買う買わないは別としてただ本を眺める。もし気にかかるタイトルや、興味のある作家、今話題の本などあれば

実際に手に取る。最近では便利というかおせっかいというか、本のカバーにたいしてはあらすじが載せてある。そのあらすじを読んでみて興味が沸いたら買ってみる。今の文庫本など100円ちょっとから高くてもせいぜい600円位である。テレビゲームをやったつもりで、また、喫茶店に行ったつもりで一冊求めたら如何だろうか。本はゲームなどと違い、その場限りのものではない。その本が存在する限り誰でも読める。クラスに持って来て皆で回して読むのも安上がりである。本はその個人にとって一つの財産であると思う。たかが一冊で大ききさだと思ふかもしれないが、その一冊一冊の積み重ねによって本のよさがわかると思う。

私と本との出会いは、小学生の頃で、誰かに買ってもらったルパンシリーズが気に入って、シャーロックホームズやルパンなどの子供向けの本をかなり買い求めた。中学になってからは、もっぱら星新一の作品でショートショートにあこがれ、当時の作品は、ほとんど読んだ。次いで遠藤周作や井上ひさしのユーモア小説に移り。高専に入ってから、専ら歴史小説を読み。四年になって土木という職業を意識してからは『無名碑』や『まぼろしの橋』など、土木に関するものなら何でもいから読みあさった。現在はというと森村・高木・和久などたちの推理小説を読んでいるが、これがまた非常におもしろく肩がこらず、やめられない状態にある。以上私個人の読書歴であるが、私は、外国の小説は今までに10冊も読んでいない。これからはわからないが、今まで少しかじってはつまらなくてあきてやめてしまった。それはそれで良いと思う。読書など嫌いならやめればよい。もちろん勉強や仕事はそうではいけないが、読書は嫌ならやめてまた次のを読む。そうしているうちに自分の現在望んでいるものがみつかるはずである。それを契機に読書の幅を広げ、内容を充実させ次々と新しい分野を開拓していくのである。

本というと、読書感想文を連想するかもしれない。だいたいあの感想文というのはおかしいと思う。本を読んで感動したら、読み終わった時に、ただ目をつぶりもう一度頭の中でその光景を想像してみるのである。感想文を書けと言われて仕方なく感動したふりをしてそれらしく書くのはナンセンスであり、空しさしか残らないのではないか。

最後に、読書嫌いのキミ、何でもいい、純愛小説でも、俗っぽいものでもハードボイルドでももちろん純文学でもいい。何かしら自分がおもしろいと思った本を読もう。長くても短かくてもいい。あんなに本があるのだから、キミに合う本もいくらかあるだろう。そ

れを見つけ、次第に本の持つ甘美な素適な世界を味わってほしい。だがくれぐれも言うておこう。自分の思想・信念を本に左右されてはいけない。自分の感情は自分で支配しよう。今が一番いい機会だ。暇と金があるはずだ。勉強なんかするより楽しいと思うのだが。それでは幸運を祈ります。本と親友になれるように。

書物を読むことについて

4M 吉田 賢治

最近の若い者は本を読まない一と年配の人というのが全くその通りだと思う。ここ数年の間に発達してまた漫画のせいだろうか、テレビのせいだろうか？その原因を外に捜すのも一方法だが、話が広がりすぎてしまうので、本自体に見付けてみたい。

まず、内容がつまらない、というよりも興味が湧かないということがあるだろう。本の種類にもよるだろうが、特に〇〇文学と名の付くものは。私の読書（生活の一部としての読書）が始まったのは三年前の一年生の冬からである。その本読みの始まった記念すべき第一号は、武者小路実篤の『友情』であった。がしかし、この作品を読んで私は、正直なところ物足りなさを感じた。つまらなかったわけではない、といって面白かったわけでもないがとにかく「これが『日本文学』と称されているものなのか」と思ってしまった。私がこれに何を期待していたのかはわからない。そう思ったのは軽く筋だけを読み流していたからかもしれないが、その理由はどうであれ、その時点で私は名の通った文学書から一時遠のいたことに間違いはない。このような場合、幸いにも私のように他の種類のものを読む気が残っていれば良いけれど、こんなことが2、3度続いたものならばその気持ちもなくなってしまおう。

不思議なもので興味の湧かない本というのは、何度活字を追っても頭に入らず2、3ページめくったくらいで投出してしまふ。それが一旦面白かったものならば、四百ページくらいの続きものでも十巻やそこから一気に読んでしまふ。

原因のもう一つ、面倒くさがりで読まず嫌いというのがある。これは随分多いことではないかと思う。確かに目の前にたいした本があったとしても、それを自分の目で一つ一つ確かめていくという作業をしなければ自分のものにならず、それはただの紙くずにも等

しくなってしまう。

だから、読まず嫌いをなくすために、まず活字を目で追う習慣を養い、その作業を苦痛と感じないようにすることが必要だと思う。それ故私は乱読を好むし、面白くないものには目もくれない。世の中には“△△小説”という気のきいた楽しい本があるが、こんなものから読み始めたってかまわないと思う。あまりそれにふけったり、あまりに若い人が読んだりするのはまずいが……。

本を読むということは苦痛なことであると思う。私も中学の頃までは全くといってよいほど読まなかった。読もうとするからには、自分で作業をしなくてはならないし時間もかかる。一日の中で読書の時間をとらなくてもその時間を満たしてくれる楽しいことは、他にいくらでもあるのだから。しかし、一度面白いと感じたら、その苦痛も楽しいものになってしまうだろう。とにかく読書しないよりはした方が良い。見解も広がるし、色々な文字や言葉・表現などに触れられる。読まず嫌いはいけないと思う。

ここで話を私自身の方に移すけれども、私は外国の作品はほとんど読んでいない。確固とした理由があるわけではないが、なんとなくとっつきにくいところがある。また川端康成の『雪国』を、その英訳文とほんの数頁ではあるが比べてみて、なおのことそう思った。それというのも、翻訳した文は翻訳した人の文であり、読む側としては受けとる感じが原文のそれとは自ら違ってくるはずである。外国の作品も原文で読めば一番良いのではあるが、そうもいかないで困ってしま

われ読む、ゆえにわれ在り

—倫理哲学科の学習の成果—

「美しい日本の私」

(川端康成、サイデンステッカー英訳、講談社・現代新書)

4 E 芥川 進

読む前に、まず、この題名は区切り方によってニュアンスが異なるのではないかと感じた。「美しい、日本の私」とすると、日本より私の方に美しさを感じ、「美しい日本の、私」とすれば、美しいのは日本で私はそれに含まれる様な形で、考え方によれば私も美し

う。

それから私は、読む本は必ず買って読むという不経済にも思える習慣を持っている。その理由として「買う価値のない本は読まない」というのが建前であるが、私の本棚の中を見てみると必ずしもそうとはいえない。どうも、読んだ本は手元に置きたいという自己満足の気持ちもあるらしい。どちらにしろ、買うからにはそれだけの内容のある本を選ぶし、月に五冊も六冊も読むわけでもないし、これで気が晴れるのだから安いものである。

それから読書傾向についてだが、私は時期によって強い片寄りが現われる。初期の頃は著者の考えをそのまま書いた意見書のようなものばかり読んだし、次は『ショート・ショート』と呼ばれる短編に凝ったし、短編も遠藤周作を境に日本文学に少々足を突込み、最近では幕末期の物語ものを読んでいる。確かに片寄りが出てくるのは自然のことではあろうと思うけれども、同じ人の作品を何遍か読んでみるとか、同じ傾向の本を違う作者で読み比べてみるとか、読みたいのだけを読むのもいいけれどこらでもう少し考えてもいいのではないかと思わないわけでもない。

読書の目的も人それぞれであらうが、大体は趣味としての読書が多いことと思う。数を読むうちに、自分の考えや生活を変えてしまうような作品の一つや二つ出てくるものであろうし、読むことは耳で聞くこととは違い、けっこういろいろな言葉が頭に残るものである。知識を得るための読書もいいが、楽しみのための読書をもっと多くの人にやって欲しいと思う。

いとはなるが、日本の私という事が強く押し出されているように感じられる。実際の場合はどちらがより近いのかと思いながら読んでみた。

「美しい日本の私」の中で著者は、盛んに美についてのべているが、その際に、日本独特とも言うべき短歌を用いている。それは、日本の美の感じ方の最もわかりやすい例だからではなかったらうか、短い言葉の連らなりから単語一つ一つの奥深い意味を考えている日本人、その繊細さが日本人であり、日本人の物の見方・考え方であり、美というものも、意味深いのだと言うことを知らせる上では。

ここで考えておきたい事は美の感じ方である。アメ

リカ的美の感じ方は、雄大さと、きらびやかさを一般的に美として感じている様に思うし、ヨーロッパ的美の感じ方は、神秘さと、透明感にある様に思う。また、アフリカなどの美の感じ方は、めずらしさと輝やかさではないだろうか。そこへもってきて日本の美の感じ方というのは、表面の目に見える部分以上に想像の域での美というものを一般的に美として感じているのではないだろうか。

それらを一般的な物で比較してみると、アメリカの美の代表としてダイヤモンド、ヨーロッパの美の代表としてクリスタルガラス、アフリカなどの美の代表として金の造形物、日本の美の代表として陶器などが上げられる。これらの美の代表として物をいろいろ上げたがそれぞれ違っている。これはどこにその原因があるのだろうか。育って来た風土・自然・文化などの影響は大であろう。そして人間気質なども大に関係して来ると思う。しかし、そんな中で共通して、何を、どのような物を、どんな事を美しいと感じるのだろうか。自分にない物、自分にできない事、自分より弱い物、自分より強い物、手に入れられない物、手に入れない物、そんなものを美しいと感じるのではないだろうか総括してみるとそれは尊いものの様な気がする。それでいてどこにでも見つけることができる。それは心が決める判断であるから。

「美しい日本の私」の最後に著者が、「虚無と言う言葉は西洋流のニヒリズムとは違う。心の根本が違っていると思います」と言う所がある。それは意味的に同じ事を言っているのに心の根本が違うという事で区別した。これは意味のある事で、まとめの様な気がした。美というのは人々の感じ方、心の判断である。だから美に定義はない、そして形さえみせない事がある。だけれどもそれを美として感じられる心がある。心は美の根源である。そして心は日本と西洋では違う。従って虚無を美と置き換えれば、美とビューティフル、シェーンは違う、それは心の根本が違うからと言う事ができる。

日本を理解するには、根本から理解しなければ何もわかるまい。日本の人の感ずる美が一つの花でそれがつばみだとわかって、それが他の物に目を向けた場合、はたして何を美としてみるのかわかるまい。人をわかろうとするならばそれは根本からその人を見なければその人を理解する事はできない、だから多少のくい違いを気にする事なく、広い目で広い心で人と交わろうとこの本はのべていた様にとれる。日本の美を述べている著者は、日本人のためにそれを述べたのではないからして、日本の美について果してどれだけ他国

の人が理解を示しただろう。そして幾人が疑問をいだいたであろうか。興味のもてるところである。そして初めにいただいた疑問は、「美しい日本の私」である事がわかった。サイデンステッカーの英訳は、はたしてどれだけ正確に短歌というものを伝える事ができたであろうか、彼自身の短歌を見てみたいものだ。

日 蓮

「立正安国論」

(田村 完誓・徳間書房)

4土 小 松 山 実

私は、前に調べた「仏教の根本思想」の中で最も興味をもった宗教、日蓮宗の開祖である日蓮の書を読んでみたいと思い、「立正安国論」を選びました。それと同時に、「日蓮」(筑摩書房)も目を通し、日蓮の生いたちや宗教活動などについても、調べてから読み通しました。

この「立正安国論」は「観心本尊抄」などと共に、日蓮の思想の背景をなす五大部といわれるものの中の代表的な著作であります。これを発表した後の迫害はすさまじいものでした。

まず、竜の口において首切り(打首)の刑。この時は、突然閃光が現われ日蓮の恐ろしさに役人は打首を中止してしまっただけでした。さらに佐渡への流罪など、彼の主張は幕府の弾圧を受け、ついには、彼を身延山まで追い払ってしまったのでした。このような刑を受けた原因は、すべてこの「立正安国論」にあったかどうかは私にはわかりませんが、この書が述べようとしていることは何となくわかりました。

では内容についてですが、この書は「問うて曰く」「答えて曰く」という問答の形で論旨がすすめられており、十問の問答から成り立っています。私は、このように問答の形で自分の考えを述べようとしているのは、日蓮が当時学んだ比叡山の論義の影響からきていると思います。ところで、この「立正安国」の四字は、本論の内容と目的とを最も端的に表現した言葉であり、また日蓮の理想を最もよく表現する言葉だと思います。日蓮の一生は、この四字のために費やされたといっても過言ではないはず。 「立正安国」とは、正法を建立して国を安ずるという意味で、これが、本論の理想であり目的であるはずですが、この言葉の背後には、国を危くする邪法が存在するという事実があり、したがって「立正」は邪法を破らないかぎり成り立たない

と思います。この書は、破邪に本文の大部分が費やしてあり、「立正」は最後の数行において説かれていたようです。

さて、本文の問答は客と主人の関係でもって行なわれていますが、具体的にあらわすと、「立正」に腰をすえる主人と、「安国」に腰をすえる客との巧みな弁証法的対話をなしていました。このように自分の考え（主張）を会話の形で訴える方法は、我々読者にとっては、とてもわかりやすく、日蓮が何を訴えたいのか、その努力が身にしみるようでした。

さて、次に十の問答の中味を検討してみたいと思います。まず、第一の問答は、近年続出する地震・暴風・飢饉・疫病等の災厄は、いかなる原因によって起こったのであるかという客の問いに対して、主人は、国に正しい思想信仰がなくなりよこしまな思想信仰がはびこっているからであると答えました。これは、天災・地妖の連続で人心は不安になり、末法（仏教の終末思想）の危機意識が高まりつつあった時に、宗教の救いを個人の内面の問題としてのみとらえることに飽き足らず、社会の歪みの是正を警告し、政治の安定のためその次元に、仏教のいわゆる正法を実現しようという仏教者としての姿勢を示したといってもよいと思います。

この後に、客がその証拠を問うわけですが、彼はその答として、「金光明最勝王経」「大集経」「仁王経」「薬師経」などの經典を用いて論じているが、その内容は皆同じで、悪王と悪僧とが、わが正法をそしりやぶれば、諸天善神は我国を捨ててみなことごとく他の正善の国へ去るだろうということであり、そうなれば、その国民は七つの難に襲われるのである。この七つの難とは、疫病の流行・外国からの侵略・国内の内乱・星や天体の運行の変更・日食と月食で日、月の光が失われること・暴風雨・旱魃であります。

さて、ここで日蓮は七つの難のうち五つの難はすでに起こっているが、残りの外国からの侵略・国内の内乱は、これからこのまま邪法がはびこっている限り、必ず起こる災難であるといっているのです。もし、現在においてこのような暴言を発したならば、相手にされないか、それとも政府が何か罰を与えるでしょう。最悪のケースとしては、国内がパニック状態になり、内乱が起きるかも知れません。

さて、鎌倉時代においては「日蓮の予言」ともいえるこの説に対してどうだったのかみてみました。この説を具体的にみれば、実に、あの〈蒙古の来襲〉のことであり、彼は国難を予言し、幕府に対して訴状を呈したのです。それに対して幕府は、竜の口において彼

を打首の刑にしたのです。このように、日蓮の教えは幕府はもちろん、民衆にも素直に受け入れてもらえず、外国からの侵略（蒙古の来襲）をまぬがれることはできませんでした。

その他の問答としては、客が「悪僧・悪王などというが、いったい誰をさしているのですか」という具体的な名を聞いてくるのでした。日蓮は、はっきりと「法然である。」と答え、「法然が著わした『選択集』は、釈尊一代の尊い教えを破って、あらゆる人々を迷わす考えを述べているのです。」といっています。このように、日蓮の書の中に必ず見られるのが、法然の浄土宗のことであり、浄土宗は「法華経」に背いた教えであると考えていて、それが民衆の間にはびこっている限り、諸天善神は離れていってしまうのだといっているのです。客はいろいろな例（書物）を出して説く日蓮の答えに迷いも晴れ、謗法の者を退治して、早く平和を招来し未来の成仏に役立てると約束するのです。

私はこの書物を読んで、日蓮の法華経に対する考えがどのようなものかは分かりましたが、どうして法然の説いた教えは邪法だと言い切れるのだろうか不思議に思いました。法然は法然として法華経を悟り、それによって浄土宗を開いたわけですが、日蓮の場合は、法然とは違った形で法華経を悟り、それを正しいと信じれば、法然のは邪法だといえるが、はたして、それが正しいかどうかは定かではないと思います。

最後に、今までいろんな宗教の本を読んできましたが、仏教において、始まりは皆同じなのに、いろいろな宗派に分かれたことは、何故なのだろうか。悟り方に違いがあるからだろうか。その辺を詳しく研究してみるのがおもしろいだろうと思いました。

「歎異抄」

（金子大栄・岩波書店）

4土 箱崎 高秀

最近、ある仏教の本を読んでみたが、そのもつ意義のようなものが非常に奥深く感じられた。それで、今までほとんど無関心に近かった仏教書を、ようやく少しは関心が起き、いろいろと乱読してみた。そこでおもしく思えたのが親鸞である。

彼は、はじめから、「他力本願」すなわち「本願を信じ、念仏を申さば佛になる」と唱えており、「自力」と思えるブツダの唱えた仏教の根本思想とは異質の様相を呈しているのである。もちろん、現在の日本の仏

教は、大体において他力であろうが、彼ほどはっきりと「他力」を強調した僧侶もあるまいと思う。これが、私に親鸞への興味を与えたのであり、また、歎異抄を選んだのは、一般的な浄土真宗の彼の教義よりも、彼自身の心境を書いた語録をもとにしていることから、彼と接するという点で、たいへん都合のよいものであると思えたからである。

さて、この語録には、親鸞個人の心境を表しているということに関心を覚えた。つまり、この書に現われているものは、本願を説くに至っての彼の告白であり、彼は、その身に感じたままをしみじみと表現しているのである。「いずれの行も及びがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞし」とか「煩惱不足のわれらは、いずれにしても生死を離るることあるべからず」というのは、その例であろう。彼は、こういった文で、人間のはかなさもろさを浮き彫りにしているのだ。ということは、それは、彼自身への反省にもつながると思う。中に、「親鸞は弟子一人ももたず候」という興味深い言葉があるが、それに至っては、もう、そういう彼の考えがはっきりと表われており、従って、あくまでも個に徹する全があるのではないかと思う。従ってこれによって彼の精神生活のすべてがわかるのではないのだろうか。

また、歎異抄の後半では、親鸞の思想に対する唯圓の批判的なものを著している。それは、真宗を知識化していることへの異議であるが、彼はあくまでも破異ではなくして歎異を説いていることがおもしろい。それだけに親鸞の教えに忠実なのであろうが、実際は、俗人の自己疎外を悲しんでいるということなのだろう。親鸞は、煩惱悪障を断ち切れないという自己の現実を悲しむものの前に開けた大いなる救いこそが本願であると説いているが、現実を見失っている人間には、その世界を知ることができず、そこに教法を知識化するという異議を生じさせてしまうのであろう。

以上、この書の内容とそれに関する考察や感想を述べてきたが、この二つに共通していえることは、彼らの教えを自分のものにできない俗人への歎きを書いているようにも思えた。従って、その文章に賛成できる点こそあれ、悲しいかな、人間の弱さが災して、私には、彼らの思想に追いつけない点がたくさんある。冒頭に、釈迦と親鸞の思想の様相が、異質なものであると感じたと書いたが、「自力」と「他力」という違いこそあれ、その思想には共通点が多く、又、我執を去れという点で、ほぼ同じ信念を貫いているのだ。こういった点が仏教の奥深いものの一つなのであろう。

読み進めている内に、いかに自分が自己疎外し、自

分勝手な方向に進んでいるかということのを改めて思い知らされた。これを機会にもっと自分を見直して見たいと思う。

『論語の講義』

—日本の思考と中国的思考との比較—

(諸橋徹次・大修館)

4 C 宮崎 雅弘

『論語』は、いつ、誰によってまとめられたかは定かでない。おそらく孔子が生きていた頃から、弟子達が孔子の言行のいくつかを書きまとめておき、それをもとにして編纂されたものだろう。

『論語』が日本に伝来したのは応神天皇の16年、百済の王仁によるものといわれ、後に唐の制度にならって大宝令という学制がたてられると、貴族階級の必読書となり、平安時代には中原・清原の両家が明経博士として世襲的に『論語』を講学するようになった。江戸時代になると武士道の形成に本書を中心とする儒教の徳目が大きな影響を与えることになった。がしかし、ここで日本人は『論語』の本質的な意味を理解せず、まちがった受け取り方をしているのではないだろうか。『論語』に次のような言葉がある。

- (1) 子いわく、君に事えて数すれば斯ち辱しめらる。朋友に数すれば斯ち疏んぜられる。
- (2) 子貢、友を問う。子いわく、忠告してこれを善道し、不可なれば則ち止む。自ら辱しめられることなかれ。(1)里仁 (2)顔淵)

これは、主君に対し、あるいは友人に対して忠告するとき、相手がききいれなかったならばやめなさい。相手がききいれようとしないのに何度も忠告をして、そのために疏んぜられたり辱しめられたりするのはおろかなことである。という意味だそうだが、日本的な考え方では、いかに辱しめられようと、いかに疏んじられようと忠告することは忠告し、主君がききいれようとしないときは、切腹をしてでも注意を促そうとするだろう。しかし、『論語』における本質的な意味を解釈すると、主君に、善悪の判断をする力があるなら、切腹をするまでもなく素直にその忠告をききいれてくれるだろうが、ききいれないのは、主君が善悪の判断がつけられず、自己を絶対だと思っているためである、ということになるだろう。日本人の多くはこれに反発すると思う。『不可なれば則ち止む』という考

え方を不純とか卑法とか思い、切腹をしてでも注意を促すことが正しいと考えるのが日本人である。

この違いは、おそらく思想的な相違からくるものと思われる。中国的な思考の根本には陰陽思想があると、以前何かの書物で読んだ記憶がある。陰陽二元論とは、易の思想である。陰陽の対立をその根本原理として、万物の生成変化をそれらの転変をもって説明しようとするのが易である。つまり、陰と陽とは対立するものであるが、陰はあくまでも陰、陽はあくまでも陽と固定したものではなく、陰は陽を内包し、陽は陰を内包するものとして考えるのが中国的な思考である。しかし、日本にはこの思考法がないため、前に述べた違いが生じるのだろう。なぜなら、忠告とは、忠告と不忠告との対立のなかから選びとったものである。その選びとった忠告には不忠告が内包されており、相手が忠告をききいれないときには、忠告に内包されている不忠告を選ぶのであり決して忠告に対立する不忠告を選ぶのではない。それが「不可なれば則ち止む」の本来の意味であると思う。ところが、日本人は忠告は忠告、不忠告は不忠告でありいずれも固定した不変のものであると考えるのである。「武士道とは死ぬことと見つけたり」というのも同じである。生と死の対立のなかから死が選び取られたものであり、「不可なれば則ち止む」は、その選び取られた死に内包する生を見ることなのだが、日本人は死というときには、ただひたすら死だけを考え、それに内包する生を顧みようとしないのである。つまり武士道においては、陽と陰とは対立して共存できないものとして考えられているのである。

例えば、日本の古典の一つである『南総里見八犬伝』の主人公である八人の犬士達は武士道の象徴として描かれているが、彼らには儒教の徳目である仁義礼智信孝悌の一つずつが与えられており、仁の犬士はあくまで仁、義の犬士はあくまで義であり、外なる不仁、不義と戦うのである。しかし、本来なら仁には不仁が内包されているのだから、仁であるためには、外なる不仁ではなく内なる不仁と戦うべきであり、それが仁を行なうことであると思う。ここに儒教本来の教えと、武士道が取り入れた曲解した儒教との相違があらわれてくる。「武士道とは死ぬことと見つけたり」というようないさぎよさは、おそらく儒教にはないと思う。つまり、儒教思想とは「不可なれば則ち止む」なのである。それは決して、不純とか卑法とかいうものでなく、現実的であり、冷静に物事を見極めようとするものなのである。

最後に、たとえその本意を曲解して取り入れられた

としても、『論語』は千数百年もの間、読み継がれ、日本人の思想形成に大きな役割りを果たしてきたことは、隠しようのない事実である。『論語』の内容が時代を超えて現代に通用するとは、一概には言えないだろうが、人間の生き方そのものは、孔子の時代も今の時代も何ら変わることがなく本質的には同じであると思うので、その意味で我々は、論語から物事の真理というものが何であるかを学びとらなければならないだろう。

「老子」

(原 富男・春秋社)

4C 木田 誠一

私が、孔子の論語に触れたのは、一年前であったろうか。そしてこの本は今、私の中に「論語は孔子の思想すなわち、儒家思想の媒体である」という概念をつくり上げたのである。

ところで、中国の歴史に関心がある人であれば、中国の思想を支える大きな柱として先程の儒家思想があることは、御存知であろう。そしてさらに、もう一つの大きな柱、道家思想の存在をも既知のものとしていることだろう。前者の場合と同様に、後者にも媒体となるものがある。それは、老子の著わした「老子」である。

そこで、私は道家思想を培った、この「老子」に触れてみることにした。私の場合、上述のような経験から、脳裏に「論語」というものをかすめつつ、かつ、若干の対比性に支配されながら、それを遂行しようと思う、なぜなら今の自分にとって、それが最良の方法なのだから。それでは、さっそく話に入ろう。

「人間の徳とは、それによって人が、よき人間となるような、すなわちそれによって人が、己れの機能をよく展開しうるような状態でなければならない」と言ったのは哲人アリストテレスであったろうか。これに似た「徳」の定義は、「老子」にも「論語」にもみられる。また「徳」とは、人間が道を得ること、もしくは、人間によって得られた道を意味する言葉なのである。ここで、すかさず先の対比性に支配された私の頭で考えると、「道」それ自体に、儒家と道家とでは相違が生じてくる。したがる、「徳」の内容も当然異にするのである。

両者の「道」について、簡単に述べれば、儒家の道は、具体的には君子の道・人倫の道・仁義礼楽の道で

あり、要するに、人間の立てた規範である。

これに対して、道家の道は人間を超えたところ、人間の立てた規範を偽として、批判するところに見つめられた「道とせざる道」、悠久不変なる無為自然の根源的な真理である。

したがって儒家の徳が、人倫の道もしくは仁義礼楽の道を得て、君子となることであり、君子となった人間の在り方を、徳とよぶのに対して道家の徳は、人間を含む一切万物の根源にある無為自然の道に目ざめ、己もまた、無為自然となることを徳とよぶのである。

強いてこの両者の相違を言えば、人間に即して人間の生き方を考えようとするのか、人間を超えたところから人間の生き方を考えようとするのかの相違なのである。

ところで、「論語」を読んだ時、「仁」という文字が数多く見られるのに驚かされたように、「老子」においても、「道」という文字の多いのには驚かされる。裏を返せば「道」とは老子の哲学の根本をなすものなのである。

「老子」では、初めに「道は、これが道だと人間の言葉で規定することのできない無形無名の究極的な実在なのだ」と説いている。

さらに、その実相を諦観しようとするれば、形にしぼられ名にとらわれる人間的な欲望から離れなければならない、すなわちこれが、人間を超えた立場なのであり、常に無欲の境地に身をおくことにより道に目ざめをもつことができる。詰めて言ってしまうえば道の本質は、「無為」である。さらに、使い慣れた言葉で言い換れば「自然」なのである。

私達は、この「無為自然」という言葉を、軽くあしらうことはできない、むしろその真意に深い感銘を、受けるべきではないだろうか。

しかしながら、ここで自然という言葉で、草木の緑などを思い浮かべられる人がいたとしたならば、たいへん空しい。それは、そんなに狭義なものではないかだ……「自然」なんとすばらしい響きを持った言葉であろう。

現代の私達の制約された社会に、自由尊重の影を、落とすべき響きではあるまいか。そしてそれは人間社会などという、ちっぽけな枠を飛び超えて天・地にまで及んでいるたいへん広義なものなのである。

したがって、天地大自然の造化のいとなみは、私達人間のように、特定の目的意識や打算の意図をもって何かしてやろうと力んだり、騒いだりするのではないのである。

例として、獣や虫を考えればそれは明らかになるで

あろう。

獣は、何も人間に食われるためにこの世に生まれてきたのではなく、虫は何もこの世を価値ありとみて生きているわけではない。

彼らは、ただ生まれてきたから生きるだけであり、死が訪れればただ死んでゆくだけである。このように天地大自然の造化のいとなみは、ただあるがままで、ただおのずからしてそうなのである。しかも、そこでは万物は一瞬といえども停止せず刻々に、新しい様相が展開され、絶えず創造的な神秘がくりひろげられてゆく、老子はこのような天地大自然の造化のいとなみの根源となるものを「道」として説いたのである。

最後に私は、老子の言う「道」に目ざめるには、自然にかえるのが一番の近道であるように思う。しかし、私達人間がもつ反自然的行いが、それをねじふせてしまうのである。

道を、自由尊重の合い言葉と言えば誇張になるであろうか、いや自然(=道の本質)こそが自由の育成されるべき場なのではないだろうか。

ま、それまでに飛躍しなくても、「老子」によって私は、自然の真意を教えられた気がする。

「物理学とは何だろうか」

(朝永振一郎・岩波新書)

3 E 武田 信武

本書を読んでみて、私たちは恵まれすぎているのではないだろうかと思った。この本は、先人の天才たちの思考の原型とはどういうものかを探ることが書かれている。しかし、私はそれに中心をおくよりも、現代に生きる私たちへの社会批判や教訓などが述べられているのではないかと、自分なりの中心のおき方で、我々の日常生活と比較しながら読んでいった。

近代物理学の基礎を築いたケプラーやティコは現代の天文学などにおいて欠くことのできないケプラーの法則を発見した。ただ簡単に発見したというけれど、それを発見するのにどれだけの努力がはらわれたか私達には想像もつかないほどである。ティコは占星家の誰もがやっていたいかなかった観測ばかりしていることにより、回りから予算の無駄使いだと思われデンマークを去るようになったり、ケプラーは、仕えていたルドルフ帝の死によってプラハを去るようになったり、母親が魔女の疑いで迫害を受けたりした。しかしそのような逆境にもかかわらず、ティコの観察力とケプラー

の数学力によってケプラーの法則が発見された。この発見は彼らの全ての人生をかけての発見だったのである。

もし現代の我々のような者たちが、現代の科学をもって乗り込んだとしてもそのような発見はできないだろう。「予算が足りず設備がそろわない。このようなものではできないはずがない。」など我々はよく口にする。もしケプラーなどが我々を見たらなんと言うだろう。「このなまけものめ」と言われそうな気がする。そしてなによりも敬意を表するのが、意志の強さである。妻子を失ったり迫害を受けたりしても、よく一徹に貫きとおせたものだと思う。私は迫害を受けたり身内が死んだりしたら、このようなことはすぐに断念してしまうだろうと思う。私はそこまでして何になるのかなとも思った。見通しが明るいものならともかく、地球上からアリー一匹見つけるようなもので、不可能に近いものをよくがんばるなどと思った。最初はケプラーなども、現代人のように人のためとか、これから先の人類のためとか、ルドルフ帝のためなどにやっているのではないかと思った。しかしこの本を読んでいるうちに考えてみると、それは他人のためではなく、自分自身のためにやっているのではないかと考えるようになった。発見をしたらそれは名誉になるだろう。しかしけっして自分の周辺が変わるわけでもない。別に天体の観測・計算なんかでなくとも何か自分の限界にどめする、そういうものを探していたのではないだろうかと思った。それに比べ現代人はどうだろう。研究などをしていて、なにか少し批判されると、「文句なんか言うな。せっかくやってあげているのに。」とかなんとか…。なんと悲しいことだろう。

ガリレオにしても同じように偉大である。その当時、権威をもっていた教会によって、宗教裁判にかけられても、自分の学説を信じけっしてゆずらず、「それでも地球は回っている。」と一言。なぜそのように信念が強いのだろうと思う程である。ニュートンの実験についても同じである。

これまで述べたことを考えると、なんと私は悲しい人間なのだろうかと思った。なぜかと言うと、私は実はこの本を読む前に、なぜこんなに長ったらしいのを読むのだろうかと思った。物理の教科書を見ればもっと短く書いてあるのにも思った。そして試験の時などは、テストの一晚前に少し見て、理解もせず暗記をする。それで結果が良ければ満足していた。そしてそれですでに物理は征服したものだと思っていた。しかしこの本を読んでみて、自分はなんとスケールの小さい人間なのだろうかと思った。先人たちの一生をかけての努力

の結晶を一晩で征服したと思っていたなんて。

この本を読んでみて我々が反省すべき点が相当数あることを教えられた。これからは出来る限りケプラーたちのようにならずとも、人に知れずとも懸命に限界への挑戦をしてみたいと思う。価値のある一冊だった。

「物理学とは何だろうか」

3E 芳賀 利幸

物理学とは「われわれをとりかこむ自然界に生起するもろもろの現象—ただ主として無生物に関するもの—の奥に存在する法則を観察事実によりどこを求めつつ追求し、数学的に表現すること、そして個々の法則をばらばらに発見するだけでなく、そのなかから最も基本的なものをいくつか選び出し、それから、他の法則が導き出される体系をつくること。」と作者はいつている。

ここで大事なものは、自然界の奥に存在する法則を数学という言葉で、エジプトの象形文字を解読するように、読むことである。これを初めて考えたのが、ガリレオである。しかし彼の解読では不十分であり、それを完全なものにしたのがニュートンである。だからといってニュートンが自然界のすべての法則を発見したのではない。彼の前には、たくさんの人々の考えが含まれているのだ。また今までより技術が発達し、人々の考え方もかわってきたのである。彼以前の人々、特にガリレオなどは人々の反感のために十分に実験ができなかったのではないだろうか。そんな彼が今の時代まで残り、これからも遠永に残ると思われる法則を発見できたのは、彼が天才以外に何者でもないからだろう。ただその時代の人々には、あまりの考えの鋭さについて行けなかったのだ。だからこそ、彼は宗教裁判にかかったのである。そんな彼でさえ失敗があるのだ。それは潮汐論であるところの本には書いてある。これを読んだ時、やはりガリレオも私たちと同じ人間であるとは思った。ガリレオの大きな発見は私から見ると「実験をする」ということだ。ガリレオ以前の物理学者は、今では常識になっている実験をせずに頭の中で考えたのである。でもよく考えればそれが当たり前かもしれない。彼らには実験したくてもそれだけの技術をもっていなかったのである。

この作者は、科学の分野でこのように言っている。「人間の持って生まれた知的欲求のあらわれが科学で

あり、人間存在に好都合であるように自然の事物を改良しようとするのが技術である」と。物理学にもこのことが言えると思う。もし、地動説を称えたコペルニクスが望遠鏡を知っていたら、もっと完全な法則が生まれたかもしれない。私たちより不利な条件を持った彼らが、どうして、今でも心の底から信じられない、地球が動き続けているなどという、だいそれた考えを思いついたのであろう。先生の言葉をかりれば、彼らは一種の気違いだったのではないだろうか。でも、それらがどこにでもいるような気違いではないことは、考えなくてもわかることである。あの今世紀最大の天才といわれるアインシュタインでも、肩にカメラをさげ、みすばらしいかっこうをしていたのだ。彼もやはり私たちと何の変わりもない人間であり、一般の人からみれば気違いに見えた人である。

ところが、彼を気違いあつかいした人はこの時代にはいない。それだけ回りの人々の考えが進歩したのだろう。だからと言って、回りの人が自然を解説できる

かといっても不可能である。なぜなら、私たちは、ある一定のことだけを何年も考えるという時間を持っていないからだ。もし、持っていたとしても、ある気遣いと言われる人が先へ先へと考えを複雑にし、それについていくのがやっとだからである。だからといって回りの人、すなわち私たちが何もできないかというのでもない。例えば、望遠鏡を使用したのは、ガリレオでも、それを発明したのは一般の平凡なメガネ屋さんなのである。こんな例はたくさんある。ただ、法則などを発見する人たちにいえることは、自分がちょっとでも疑問におもったことを真剣に考え、結論を導き出し、それに信念をもつことである。だから、学校にろくに行っていないワットでさえ、事物の根本までさかのぼって考えたからこそ、あの様にすばらしい発見ができたのであろう。

このように物理学とは、物ごとの根底にさかのぼって考えることであり、そこである人は霊の力を知り、ある人は、数学という言葉を知るのではないだろうか。



冬休みの読書

山の本

2M 永井 慎一

冬休みに入るに当たって、私が目標としたことは、本を多く読むということだった。最近、井上靖の小説「氷壁」を読み感動し、山についての本がないかと書店内を探し回っていると、新田次郎の山岳小説が目についた。そこで、その小説を全部読んでやろうと思ったのである。

十数冊の中から最初に選んだのは「栄光の岩壁」という上下にわたる長編小説である。これは、実在の人物をモデルにして、あらゆる困難に打ち勝つ話で、日本人としてはじめてマッターホルン北壁を征服するのである。彼は人並の足ではなく、両足先の大半を18歳のときに凍傷で失ってしまった、足でない足でやってのけたのである。私は、この小説に「強さ」を学んだ。

次に読んだのは、「縦走路」「蒼氷・神々の岩壁」である。どちらも、学ばされることの多いものだった。

冬休み中に読んだものは、以上だけだった。いつも、だらだら過ごしてしまう長期休業だが、今までよりは多く本を読んだ。が、やはりまだまだ読む時間があっ

たのに、それをやらなかったのは、いつものようだったのかもしれない。(そんな中で、アルバイトをやったので規則正しい生活は送れたつもりである。)

「こころ」の中の矛盾

小さな論考

2M 佐藤和宏・永山義勝

近代日本文学の代表的作家である夏目漱石の小説には、「坊ちゃん」、「吾輩は猫である」、「三四郎」など有名な作品が数多くある。その中でも、この作品は、秀作であり、数多くの人に読まれている。これからもそうであろう。

この作品は、三つの部分から成っているのだが、「先生と遺書」という部分にあまりに有名である。

この部分は、「私」が東京の小石川にある家に下宿するところから始まる。そして、その「奥さん」と「御嬢さん」、後からここへ下宿する「K」との人間関係が、「私」の遺書という形で描かれているのだが、「この家の間取りに矛盾がある」と授業中に指摘され、それがこの文を書くこととなった動機である。

初めに、小説文中のこの家の間取りに関する部分を抜き出し、整理してみよう。新潮文庫の本から。

① 私の部屋の描写

八畳。床の横に違い棚がある。南向きの縁と反対側に一間の押入れ。窓はない。(P.150)

② 私の室の違い棚にある琴は、度々鍵の手に折れ曲がった筋違の室に運ばれる。(P.151)

③ 御嬢さんが私の室へ立入る時

縁側を直角に曲がって私の室の前へ。又は、茶の間を抜けて、次の室の襖の影から…。(P.155)

④ 御嬢さんの室は、茶の間と続いた六畳。(P.155)

⑤ Kの室

私の座敷に付いていた四畳。(P.175)

玄関を上がって私の室へ入るには、この室を必ず通らなければならない。(P.175)

⑥ 玄関から真直行けば、茶の間、御嬢さんの室。それを左へ折れると、Kの室、私の室。(P.182)

⑦ (ある日の御嬢さんの行動)

私の室からすぐ席を立て、縁側伝いに向こうへ行ってしまった。(P.195)

⑧ (Kが自殺した夜の私の室)

何時も東枕で寝る私が、その晩に限って偶然西枕で……(中略)。私は枕元から吹き込む寒い風で……(以下略)。(P.228)

これらの条件から、この家の間取りを考えてみた。最初に『私の室』についてであるが、前記の①、④

⑤、⑧より考えると、次のように考えられる。(A図)

次に各室の配置を考えてみる。しかしこの小説中には、前記以外に間取りに関する描写がなく、あまりに漠然としている。例えば、廊下はあるのかなのか、奥さんの室や下女の室、台所など、他の室はどう配置されているのか、などである。いずれにしても条件が少ないため、はっきりと決定するのは困難である。従ってここでは、なるべく条件を多くあてはめ、かつ単

純な配置と思われるものとしてあげた。決して正しいと言えない事を繰り返しておく。

さて、こう考えると、小しの矛盾が生じてくる。

まず、私の室へ行く方法である。⑤の文を見て欲しい。玄関から私の室へ行くには、必ずKの室を通らなければならないとある。しかし③、⑦の文では、縁側を通して私の室へ行くことができるとある。解釈の仕方にもよるが、単純に考えると縁側を通ることは可能である。これを裏付けるものとして、前に述べてはいないが、Kが自殺したとき、私が奥さんと呼ばれた行動がある。それは、「私は奥さんに目が覚めているなら、ちょっと来てくれと…(中略)…私の後について来ました…」と描かれているのだが、Kは自分の室で自殺したのに、どうやって私と奥さんは、Kの室を通らずに私の室へ来ることができたのだろうか。これが一つの矛盾である。

細かいことでは、まず、玄関が北向きになることである。今日でさえ、家相を気にするものだ。それが、明治の中ごろ、あるいはそれ以前に立てられた家に、北向きの玄関とはおかしいのではないか？

次に、もう一度⑥の文を詳しく書き出す。「玄関から真直に行けば、茶の間、御嬢さんの部屋と二つ続いていて、それを左へ折れると、Kの室、私の室という間取なのですから、何処で誰の声がした位は、久しく厄介になっている私にはよく分かるのです。」とある。ここで、「何処で…能く分かるのです。」と言っている。こう言うのだから、格子を抜けて玄関前から、Kの室、私の室が見えることになり、当然その前には庭らしきものがあるのだろう。ここで、①の文から、私の室には窓がひとつもないとあるので、結局、壁しか見えないことになる。そこから笑い声が聞こえて、それで場所と誰の声かがわかる、というのも不自然のような気がする。

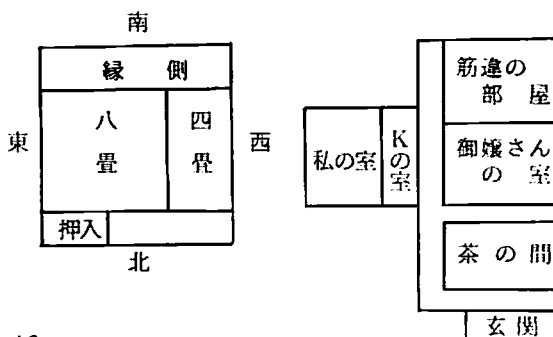
これらの矛盾と思えるもの、又思わざる得ないものは、漱石が意図して行なったものなのだろうか。それとも偶然なのか。いずれにしても、彼の存在しない今では、何もいえない。がしかし、これらの事が、一層この作品を暗くしていると考えられることはできるだろう。

※(紹介) 学生層に最も長く古い人気のある作家。その中で現代国語の教科書にも採られ最も多く読まれる作品の中で、あれほど精細な考察描写をしたこの作者にしては、千慮の一失とも思われるが、つじつまの合わぬことについて、二人の学生諸君が鋭く読み深く考えてみた跡である。

今までこのことをとりあげた論を世上に見ないので、公表の価値があると思われる。(授業者 池田)

A 図

B 図



卒業研究一覽

在学5年間の学習と読書とのまとめりとして、本校のレベルを示すものであり、このためには「特別貸出し」の便宜も供している。

(図書館規程 第12条 卒業研究のため必要あるときは指導教官の承認を受けて5冊以内を1か月以内帯出することができる。)

機械工学科

題 目	氏 名	指導教官
遊星歯車減速機における歯車の荷重分担率について	小川 広幸 ・ 片平 英司 小山 明夫 ・ 鈴木 賢二 与羽 忠彦	森 田
銅メッキ応力測定法による横穴を有する軸の応力集中低減について	北村 勅 ・ 鈴木 一生 鈴木 和弘 ・ 戸井田 勝 松本 照夫	佐 藤
重力式ヒートパイプの熱特性	五十嵐徳幸 ・ 岡田 生夫 佐藤 勲 ・ 鈴木 年彦 武田 寛則	佐 藤(研)
内燃機関のメタノール混合燃料に関する研究	四家伸一郎 ・ 柴崎 恒義 鈴木 英紀 ・ 湯浅 勉	窪 田
流れの可視化について(曲管内の不安定現象)	菅野 博 ・ 藤社 秀一	中 山
油圧制御系におけるCADのためのリリース弁の動特性の解析	遠藤 孝英 ・ 影山 忠男	石 垣
機械製図におけるCAIプログラムの開発	遠藤 義文 ・ 森合 真裕	
開口部からの音響放射の遮蔽について	佐藤 幸助 ・ 吉田 貢	渡 辺
丸鋸の騒音制御について(鋸身防振の効果と発生音源について)	西山 一美 ・ 渡辺 喜久	
円板からの放射音について	郡司 税夫	
有限要素法による音場解析	郡司 康弘	
光弾性による熱応力の研究	小島 義巳 ・ 鈴木 基之	高 橋

電気工学科

題 目	氏 名	指導教官
現用内装材における吸音率周波数特性の測定	磯貝 拓	渡 辺
O.P-Amp.I.C.を用いたアクティブ・フィルタの設計・製作	遠藤 清	

題 目	氏 名	指導教官
水槽による防音壁のしゃ音特性の実験	加藤 要一	渡 辺
トランジスタを用いたアクティブ・フィルタの設計・製作	紺野 俊康	
熱電発電の基礎実験	菅野 裕智	鴨 池
ポリエチレンの課電劣化	寒河江忠嘉 ・ 星 直澄	
FETの温度による劣化	松下 孝男 ・ 緑川 卓弥	
半導体硝子の製作と抵抗温度特性	郷田 道弘 ・ 古戸 孝	岩 間
ELの発光効率改善の試行実験	石川 重信 ・ 関根 康教	
接触部品の劣化試験	大滝晴司・岡本覚・鈴木敏敬	佐 藤
超音波探傷波形解析用2次元FFTデジタル処理システムについて 超音波信号伝送回路	賀沢 秀樹	村 田
〃 画像処理システム	国井 秀雄	
〃 画像メモリ	佐藤 忠満	
〃 メモリの増設と信号処理回路	渡辺 清	
窒素ガスレーザー発振装置の設計・製作	久保木智一	奈 良
デジタルPLL周波数シンセサイザーの設計・製作	鈴木 克俊	
O.P.Amp.I.Cを用いた各種回路の設計・製作	村田 泰章	
いわき地区の配電系統拡充計画	伊藤 雄二 ・ 星 弘泰	内 藤
電力需要増加に伴う新変電所の設計	大越 吉弥 ・ 星 昭二	
マイクロコンピュータを用いた電子回路解析	中森 昌治 ・ 渡辺 富長	春 日
論理回路の故障診断	加藤 修一 ・ 近内 末男	
スイッチングレギュレータ型定電圧電源装置の設計・製作	荻野 晃一 ・ 若松 立也	大 沢
キーボードによって1Vステップで1～15Vのプログラムができる定電圧源	熊谷 昌美	

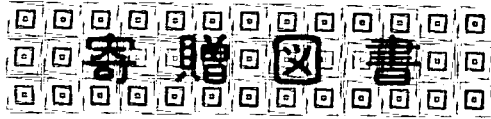
工業化学科

題 目	氏 名	指導教官
光導電性酸化亜鉛の研究	安部慎一・奥田雅子・草野昌宏	大 隈
湿式合成による酸化亜鉛の研究	今泉 悟	
ガソリン・メタノール混合燃料の蒸留におけるメタノールの定量	阿部 隆之	村 上
ガソリン・メタノール燃料の考察	五十嵐喜信 ・ 緑川 澄之	
ガソリン・メタノール混合物の蒸留共沸成分の測定	紺野 浩	
マンガノジュール硫酸浸出液からの有価金属の回収	石川 利幸	伊 藤
マンガノジュール硫酸浸出液からのセメンテーションによる銅・ニッケル・コバルトの回収	小川 芳明	
小名浜港における水質調査	小桧山 博 ・ 佐川 清水	
マンガノジュール中のCoの抽出（溶媒抽出法）	丹野 信一	
変法ウイティッヒ反応を利用したアゾ染料の合成	大平 泰章	小 磯

題 目	氏 名	指導教官
セルロースのグラフト重合による染色性の検討	黒川 政彦	小 磯
けい光増白剤の合成的研究	四家 豊彦	
セルロースに酸性基を導入することによる染色性の改善	松本 恵子	
ポーラログラフによるフラボンの定量	川口 勝弘	引 地
イネ・シュンギク体内におけるCd,Zn化合物の形態について	星野 武志 ・ 松永 良平	
フラボンおよびフラボノールの光酸化分解	見留 隆男	
抗ガン剤（植物抽出物）に関する研究	佐々木 博	金 田
ヘビのネゴザ中の有機金属（Zn,Cd）化合物の抽出と構造解析	斎藤 勝啓 ・ 西間木祐人	
マンナンによる脂質消化の抑制	鈴木喜美江	
水- γ -ブチルアルコール混合溶媒中における $[\text{Co}(\text{NH}_3)_6]\text{Cl}_3$ の会合定数	白土 芳江	高 橋
会合定数のための解析用プログラムの作製	中山由紀夫	
Cr,Coのヘキサアンミン錯体の水- γ -ブチルアルコール系での会合定数	吉実 年正	
レジンモルタルの強度および性状について	服部 正博	玉 田
銅スラグを骨材としたレジンモルタルの強度-重質炭カル（微粒充填剤）を使用した場合としない場合との比較-	渡部 哲弥	
ガスクロマトグラフィーにおけるカラムの研究	松本 正義 ・ 渡部 良重	小 林
電子技術の化学工学への応用	渡辺 英二	大 沢
乳化重合法によるハイポリマーの量子論的解釈	渡辺 孝道	井 上
ポリ（4,4'-スチルベンテレフタルアミド）の成形加工	渡辺 誠	

土木工学科

題 目	氏 名	指導教官
軟岩ズリの工学的性質について	荒川 隆 ・ 猪狩 倫	佐 藤
ハイブリッド・モデルを用いたき裂先端近傍のFEM解析	荒堀 泰輔 ・ 飯塚 俊昭	山ノ内
コンクリートの凍結融解について	五十嵐 武 ・ 大関 岩男 鈴木 守彦 ・ 渡辺 芳寿	志 賀
河川の自然汚濁についての考察	磯上 知良 ・ 菅野 政光	橋 本
電卓による台形断面開水路の水面形計算	大塚 毅 ・ 三瓶 徳久	官 野
雄物川の流量解析について	岡田 一也 ・ 小島 一徳	官 野
コンクリートの乾燥収縮について	神永 秀明 ・ 草野 真一	志 賀
伝達マトリックス法による構造解析	梶原 明	根 岸
プレートガーダー（鋼道路橋）主桁配置に関する研究	菅野 良一	土 居
平一小名浜間の鉄道ルート選定	桐原茂嘉・坂本直樹・武村和浩	高 橋
平面構造における弾塑性解析	草野 欽一	根 岸
鋼道路橋箱げたの適用支間に関する研究	国井 好幸	土 居
道路交通に伴う振動と騒音	作田孝行・佐々木輝行・玉川文夫	佐 藤



このたび下記各位が、図書を寄贈して下さいました。厚くお礼申し上げます。ついでには末長く図書館に備付け活用させていただきます。

松崎三重良（電気工学科教官）殿

橋本順次
論理回路入門 日刊工業社聞社

北村日出夫
情報行動論 誠文堂新光社

大泉充郎
J I S に準拠にした F O R T R A N 基本
コース オーム社

星野道男
電子計算機概論 日刊工業新聞社

雨宮好文
パルス回路の考え方 同

E D P 研究会編
問題解答情報処理技術者受験必携 同

中川一郎
電子計算機入門 同

松平誠 プログラム方式による E D P 入門 同

高須達編
電子計算機のプログラミング 同

本多波雄
情報理論入門 同

加瀬滋男
オペレーションズリサーチの手ほどき 同

鈴木清 マイクロ波回路の基礎 啓学出版

川上元郎
J I S 使い方シリーズ色の常識 日本規格協会

日本電気情報処理教育部編
コンピュータ入門 日本能率協会

井上正明
コンピュータの手びきプログラミングの
考え方 数研出版

駒宮安男
最新電子計算機入門 新文堂新光社

浦昭二編

F O R T R A N 入門 培風館

A. I. フォーサイス
コンピュータサイエンス入門 I 同

吉澤四郎編
新しい電池 電機大出版局

山本賢三
真空電子工学 廣川書店

中山隆 電子計算機と数値解析 槇書店

石川太郎
電子工学概論 森北出版

古明地静雄
電子計算機工学 同

佐藤利三郎
電気通信 I 朝倉書店

虫明康人
電気通信 II 同

大泉充郎
電子計算機 II 同

松本欣二
フォートランプログラミング 同

電子通信学会編
応用電子工学概論 コロナ社

島村敏 基礎ラプラス変換 同

大川善邦
計算機制御の基礎 同

電気通信学会編
電子計算機 同

新田謙治郎
タイムシェアリングシステム 竹内書店

宮川雅年
コンピュータの手びき基本知識のすべて 数研出版

情報処理教育技術研究会編
ハードウェアの基礎知識 日刊工業新聞社

内藤正義（電気工学科教官）殿

青少年の座右銘 続 現代新潟の百人 育英出版会

東京電機大学殿
丹羽保次郎 人と業績 東京電機大学出版局

松下電気産業殿
松下幸之助 人を活かす経営 P H P 研究所

コクヨ株式会社殿

決断

大阪新聞社

平活版所殿

齊藤伊知郎編

諸橋元三郎 その人間と周辺

NHKいわき放送局殿

日本放送協会編

NHK年鑑 Radio & Television

Yearbook

日本放送出版協会

北野生涯教育振興会殿

持田栄一編

生涯教育事典

ぎょうせい

同 資料文献

同

日本大学生産工学部図書係長殿

塩谷正雄

強風の性質

開発社

国際電信電話株式会社殿

国際電信電話株式会社二十五年史

国際電信電話株式会社

国際電気通信関係法制の研究

同

いわき市殿

いわき市史編さん委員会編

いわき市史 5巻 自然 人文 いわき市

同 7巻 民俗 同

同 8巻 原始 古代 中世資料 同

同 9巻 近世資料 同

明治書院殿

宮内三二郎

とはすがたり 徒然草 増鏡新見

明治書院

磐城高等学校殿

磐城八十五年のあゆみ 1979 磐城高等学校

旭硝子工業技術奨励会殿

旭硝子工業技術奨励会研究報告

Vol.33 1978

旭硝子工業技術奨励会

外務省国際協力事業団殿

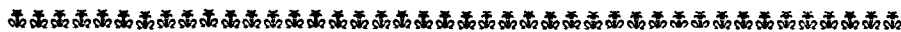
海外移住の意義を求めて

外務省国際協力事業団

日鉄工業株式会社殿

四十年史

日鉄工業株式会社



新着図書目録

※印は図書館他は各教官の研究室に所在するものを分類別受入順に記載

総記

- 福島民報縮刷版 昭和54年9～11月号
福島民報社※
- 朝日新聞縮刷版 昭和54年10月号
朝日新聞社※
- 図書委員ハンドブック
全国学校図書館協議会※
- 辞海 上中下巻 1979年版 上海辞書出版
- 朝日新聞社編
- 忘れられない本 朝日新聞社※
- 林三郎 新聞とは何か PHP研究所※
- 東洋文庫
- 26 長崎海軍伝習所の日々 平凡社※

哲学

- 71 アラビアンナイト 2 平凡社※
- 80 今昔物語集 1 同 ※
- 356 モンゴル帝国史 5 同 ※
- 368 東洋通史記 1 同 ※
- 人類の知的遺産
- 25 玉陽明 講談社※
- 49 バクーニン 同 ※
- 道元の生涯と思想 春秋社※
- 高木豊 その行動と思想 評論社※
- K. レーヴイット
- ニーチェの哲学 岩波書店※
- 芳賀登 国学の人びと その行動と思想 評論社※
- 竹田駿洲
- 日本人の「家」と宗教 同 ※
- 三木清 バスカルにおける人間の研究 岩波書店※
- 野田又夫
- デカルトとその時代 筑摩書房※
- H. リンデマン
- A. T. 訓練法 心の魔術 ビジネス社※
- 小泉仰 比較思想のすすめ ミネルブ・書房

- 日本思想史講座 別巻1 日本人論 雄山閣※
- ハイデックが選集 27 物への問い 理想社※
- 講座現代の人間学
- 4 歴史理論と人間像 白水社
- 日本仏教基礎講座
- 3 真言宗 雄山閣※
- 人と思想
- 5 プラトン 清水書院※
- 12 バスカル 同 ※
- 22 ニーチェ 同 ※
- 34 サルトル 同 ※

歴史

- 渡辺保 藤義経(人物叢書 123) 吉川弘文館※
- 高野澄 彰書の時代 徳間書店※
- 今永清二
- 福沢諭吉の思想形成 勁草書房
- 人物現代史
- 12 カストロ 講談社※
- 日本地誌

2 北海道
日本歴史地名大系
20 長野県の地名
角川日本地名大辞典
4 宮城県

社会科学

日本教育年鑑 昭和55年版
頼正通編
化学系の道徳と就職
三井澄雄
化学指導ノート
一藤哲司他
公社 公団 事業団
水津清 北方領土奪還への道
シエルドン、S.ウォーリン
西欧政治思想史 I
宮沢俊彦
憲法
人間探究の社会心理学
1 人間と社会
2 人間と人間
3 人間と集団
4 人間と文化
5 日本の社会心理学

自然科学

福田安蔵
詳解応用解析演習
E.P. ノースロップ
ふしぎな数学
E.T. ベル
数学をつかった人びと 上
田多井吉之助
生活をあやつる神秘のリズム
松本淳治
眠りとはなにか
矢野健太郎
大学演習微分方程式
谷一郎編
流体力学実験法
岩波書店
岩波英蔵
基礎力学演習流体力学
佐々木達治郎
完全流体の流体力学
友近吾 流体力学
大谷一男編
基礎実験英語辞典
コスモランゲージ
生井武文他
粘性流体の力学
理工学社
道喜天代他
新版榮譽学実験法
三共出版
R. ブランド
科学技術者のための英文ポリッシュアップ
培風館
ジョンクラーク
沿岸域の保安と開発
思考社
G. Charlot
溶媒内の化学反応と平衡
丸善社
上野景平
EDTAコンプレキサン化学
南江堂社
福井謙一
化学反応と電子の軌道
丸善社
アンドリュース

二宮書店
物理化学 上下 生命科学へのアプローチ
廣川書店社
高田芳矩
吸光光度法の実際 講談社社
小野宗三郎
物理化学 I 共立出版社
吉田政幸
分子軌道法をどう理解するか
東京化学同人社
高橋謙 大学演習有機化学 丸善房社
橋本吉郎
英日英最新化学語辞典 三共出版社
J. ケンダル
賢者の化学者たち 東京図書
J.B. Lambert
有機化合物の構造解析 上 東京化学同人
R.J. Abraham
1 H. および 13 CNMR 概説 化学同人
吉田美穂子
要説栄養生化学 三共出版
藤掛省吾他
解説化学計算の基礎 東京電機大学出版局社
分析化学
1 基礎 1 廣川書店社
2 同 2 同 社
3 定量分析 同 社
4 定量分析および電気分析 同 社
5 物理分析 同 社
丸安隆和
日本の衛星写真 朝倉書店社
唐春宗 全有機化合物名種のつけ方 三共出版社
太兼廣光
化学者のための英語動詞活用辞典 同 社
橋本吉郎
英独羅日化学略記号辞典 同 社
岡 新化学ドイツ語辞典 同 社
加藤与五郎
創造の原点 同 社
マノロフ
化学をつかった人びと 上、下 東京図書社
山本大二郎
新化学実験図説 講談社社
A.E. Marcell
配位化学 I 総合とスペクトル 内田老鶴園新社
無機応用比色分析 6 総論総索引 共立出版社
フローチャートによる食品科学実験 地人書館社
分析化学辞典 共立出版社
日本化学会編
化学防災指針 1, 2, 丸善社
同 超高压と化学 化学総説 No.22 1979 学会出版センター
天野慶之
食品衛生学概論 恒星社厚生閣社
山口達明
有機化学の理論 三共出版社
A.D. Cross
赤外線吸収スペクトル入門 東京化学同人社
浅原照三他
溶剤ハンドブック 講談社社
石橋弘毅編
溶剤便覧 信書社社
堀口博 化学物質の安全性危険性 三共出版社
高申一郎

化学知識 南江堂社
川本和明
生活と化学知識 三共出版社
喜多英明
化学入門としての基礎物理化学 学術図書出版社
吉田高年他
化学の開眼 東京化学社社
朝比系政務
化学 同 社
C.H. シンブツン
空気と人間 東京化学同人社
理工学基礎講座
23 量子化学 朝倉書店社
24 物質と光 同 社
27 物性論 同 社
28 物質の構造 同 社
実験物理学講座
30 プラズマ核融合 共立出版社
現代無機化学講座
5 錯塩化学 技術堂社
基礎化学選書
13 構造有機化学 丸善房社
現在天文学講座
1 地球回転 恒星社厚生閣社
シリーズ新しい応用の数学
21 数の構造 教育出版
村上綱一郎
知の革命史 6 医学思想と人間 朝倉書店社
後藤金英他
流れの安定性理論 数値解析とその周辺 産業図書
D.G. Provis
Waves on Water of Variable Depth Springer-Verlag
Philip M. Morse
Theoretical Acoustics Mc Graw - Hill
Peter Lax
Calculus with Applications and Computing Spring - Verlag
A. Kandel
Fuzzy Switching and Automata Arnold
K.A. Bowen
Model Theory for Modal Logic Reidel

工学・技術

地下水ハンドブック 建設産業調査会社
昭和55年版建設要覧 建設工業調査会
現代カラーテレビ技術 オーム社
建築音響関係 JIS 解説 1979 日本音響材料協会
昭和53年度制定プレストレストコンクリート標準示方書 土木学会
道路橋示方書 同解説 1 共通編 3 コンクリート編 日本道路協会社
学術論文の書き方発表の仕方 電子通信学会
昭和54年電気学会東京支部大会講演論文集 1, 2, 電気学会
昭和54年電気関係学会四国支部連合大会講演論文集 電気関係学会四国支部
第1回コンクリート工学年次講演会講演論文集 日本コンクリート工学協会

コンクリート構造物の破壊事故は教える 日本コンクリート工学協会	11 化学工学実験法 朝倉書店	環境問題と世界史 公害対策技術同友会
遠心ポンプにおけるポンプ内流れの羽根車 等動 海外技術情報センター	岡崎義則 遠路中心線の設計法 山海堂	沼田政矩編 鉄道工学 技報堂出版
解説河川管理施設等構造令 山海堂	藤原功編 記録用材料と感光性樹脂 学会出版センター	吉町太郎一 橋樑の理論と計算 石崎書店
地域と交通 大明堂	土橋正二 ガラス表面の物理化学 講談社	吉江充他 自動制御論 実教出版
プレストレストコンクリート標準解説資料 土木学会	安藤淳平他 無機工業化学 東京化学同人	藤本武助 伝熱学概論 文献社
A/D/A コンバータアプリケーションマニ アル エレクトロニクスダイジェスト セメントコンクリート問答 セメント協会 コンクリート工事現場技術者の手引き 同	堀口博 新界面活性剤 三共出版	福永節夫 図説機械学 理工学社
PSコンクリートによる浮上式海上空港の 構造 同	小田良平 界面活性剤の合成と応用 積書店	生井武文他 圧縮性流体力学 同
道路構造令の解説と運用 日本道路協会	高橋越良 界面活性剤ハンドブック 工学図書	Philip H. Enslow マルチプロセスと並列処理 近代科学社
測量計算範例集 日本測量協会	須賀恭一 香料の化学 講談社	山口静也 最新精選 過度現象演習 啓学出版
クロノイドポケットブック改訂版 日本道路協会	富山新一 化学洗剤とその周辺 雨江堂	米国内務省開拓局編 コンクリートマニュアル 国民科学社
昭和49~53年測量士補国家試験問題総 合解説集 日本測量協会	城塚正編 化学工学用語事典 オーム社	S.P. Timoshenko 材料力学本論 コロナ社
昭和55年測量士測量士補国家試験受験テ キスト 同	F. クライツグ 確率統計入門 培風館	藤田賢二 下水道工学演習 学友社
環境アセスメントマニュアル 環境技術研究会	山田順治 わかりやすいセメントコンクリートの知識 鹿島出版	小坪清真 土木概論学 森北出版
ビル住宅設備機材事典 産業調査会	日本化学会編 新版プラスチック 大日本図書	R.E. グットマン 不連続性岩盤の地質工学 同
図解フォートラン入門 日刊工業新聞社	井上勝也 さびの科学 三省堂	松本嘉司 土木解析法 1.2. 技報堂出版
JISに準拠したFORTRAN基本コー ス オーム社	日本化学会編 炭化水素 丸善	J.C. ジューガー 弾性破壊流動論 共立出版
6500マイクロコンピュータファミリープロ グラミングマニュアル イーエスディラボラトリ	水銀 同	Larry J. Segerlind 応用有限要素解析 丸善
MONITOR FILE 同	望素酸化物 同	近藤次郎 数学モデル 同
デザインデータブック 日本橋梁建設協会	カドミウム 同	中川徳郎 図解測量受験演習 現代理工学出版
Y.A. ドルマン 凍結工法 鹿島出版会	硬質酸化物 同	同 応用測量 現代社
小岩明 新しいプログラミング言語 PL/I 日刊工業新聞社	小島和夫 化学技術者のための熱力学 培風館	同 測量技術 同
鈴木光彦 図解電子計算機システム 同	沢島孝成 エンジニアのための応用機械工学 日刊工業新聞社	同 公共測量作業規程 日本測量協会
T.H. ネイラー コンピュータシミュレーション 培風館	植村恒表編 画像計測入門 昭晃堂	千夏春味夫 現場技術者のための総合測量 上, 中巻 工学出版
河合四郎 トランジスタ回路の解説 東海大学出版会	土木学会編 構造物の安全性信頼性 土木学会	小池為雄 応用土木概論学 森北出版
原留表吉 半導体物性工学の基礎 工業調査会	竹内敏雄 橋と橋 弘文堂	川本統万 地盤工学における有限要素解析 培風館
尾本義一 交流理論演習 共立出版	基礎土構造研究会編 基礎構造設計資料 技報堂出版	関本甫 コンクリート構造の境界状態設計法 共立出版
片方善治 トランジスタ増幅回路の設計法 産報出版	川上啓他 土木構造物の設計 基礎編 国民科学社	岩崎訓明 コンクリートの特性 同
和田正信 半導体工学 朝倉書店	日本建設機械化協会編 地下連続型工法設計施工ハンドブック 技報堂	水工アスファルト研究会編 水工アスファルト 鹿島出版会
伊藤祐弥 わかりやすいFM技術 産報出版	高橋清他 下水道施設 計画と設計 明現社	鈴木康一 最新アスファルトコンクリート舗装 理工図書
森口繁一 JISFORTRAN入門 下 東京大学出版会	高松武一郎編 環境システム工学 日刊工業新聞社	赤塚雄三 水中コンクリートの施工法 鹿島出版会
コンクリートブック No.1 コンクリートの材料 セメント協会	井出哲夫 水処理工学 技報堂	小谷昇 図解土木講座アスファルト混合物の知識 技報堂出版
No.2 コンクリート配合 同	中松義郎 三倍の人生 学習研究社	堀川啓甫 土木材料 1 鋼材 共立出版
No.3 コンクリート施工 同	W. チュルニン 建設技術者のためのセメントコンクリート 化学 技報堂出版	同 2 コンクリート 同
No.4 コンクリート管理 同	神谷吉吾 電力資源の開発と建設 同	同 3 アスファルト 同
土木施工総業委員会編 河川砂防ダム編 '78土木工事施工例集 5 山海堂	大場英樹	西沢紀昭 改訂コンクリート工学演習 国民科学社
上水道下水道 同 6 同		田村利昌 運動機入門 1 コロナ社
工業化学基礎講座		

生井武文
粘性流体の力学 理工学社
宗孝 使用実例に基づく機械要素の実用設計 日刊工業新聞社
服部敏夫 機械工学標準問題と解説 技報堂出版
梶谷洋司 回路のためのグラフ理論 昭晃堂
阿志久郎 ラジオFM放送用受信機 兼六館
小堀寛 システム制御理論入門 実教出版
E.D.P.用語研究会編 図解電子計算機用語辞典 日刊工業新聞社
吉川和広 土木計画とOR 丸善
国道路構設計研究会編 国道路構設計資料 理工図書
橋梁研究会編 鋼橋設計資料 技報堂出版
土木学会編 土木工学ハンドブック 上,中,下,資料編 同
S.P. チモシェンコ 構造力学 下 ブレイン図書
成岡昌夫 構造力学演習 国民科学社
久保慶三郎 構造力学演習 学献社
西脇威夫 構造力学計算法例題による詳解法の比較 彰国社
日本河川協会編 日本河川水質年鑑 1979 山海道
角田秀夫 解説トランジスタ回路 東京電機大学出版局
J.T. オーテン 非線形連続体の有限要素法 I 培風館
C.R. バレット 材料科学 I 材料の微視的構造 同
小西一郎 鋼橋基礎編 1.2, 設計編 1.2 丸善
白石俊多 基礎工. II 技報堂出版
藤井克彦他 自動制御の基礎 1~3 理工学社
春日屋伸昌 構造力学演習 国民科学社
伊藤健一 トラブルをさけるための設計変更と仕様書 日刊工業新聞社
三好俊郎 有限要素法構造要素の変形破壊挙動の解析 実教出版
春日保男 工学基礎機械要素と生産加工 共立出版
大学講座土木大系
8 土木材料 1 鋼材 2 コンクリート
3 アスファルト 共立出版
コンクリートライブラリー
11 緻密な空けきつめのためのセメント 注入における混和材料に関する研究 土木学会
20 フライアッシュを混和したコンクリートの中性化と鉄筋の発錆に関する長期研究 同
24 第 2 回構造用軽量骨材シンポジウム 同

25 高炉セメントコンクリートの研究 土木学会
26 鉄道橋としての鉄筋コンクリート斜角げたの設計に関する研究 同
34 鉄筋コンクリート終局強度理論の参考 同
44 プレストレストコンクリート標準示方書解説資料 同
同 昭和53年制定 同
土木工学大系
7 連続体の力学(Ⅲ) 彰国社
9 材料工学(Ⅰ) 同
17 プロジェクトマネジメント 同
22 国土計画 同
23 都市計画および農村計画 同
27 エネルギー開発 同
29 国土保全 同
橋 1977-1978 同
土木構造物設計計算例シリーズ
2 改訂プレストレストコンクリート橋の設計計算例 山海堂
3 改訂鉄筋コンクリート橋の設計計算例 同
4 改訂くわいおよびケーソン基礎の設計計算例 同
5 直接基礎および橋台橋脚の設計計算例 同
6 改訂道路構造物の設計計算例 同
わかり易い土木講座
4 応用力学 I 彰国社
5 同 2 同
Albrecht Kuske Photoelastic Stress Analysis John Wiley
The Mathematical Semantics of Algol 60 Oxford
Standard Specifications for Highway Bridges American Association
宮本博 Recent Research on Mechanical Behavior 東京大学出版局
産 業
駒村富士弥 治山砂防工学 森北出版
芸 術
波多野勲 水泳教室 大修館書店
グスタフ・コホナー 姿勢を正しくするために ベースボールマガジン社
浮世松泉花
7 メトロポリタン美術館ニューヨーク公立図書館 小学館
日本古寺美術全集
2 法隆寺と斑鳩の古寺 集英社
古寺巡礼京都
13 広隆寺 談交社
15 高山寺 同
16 大徳寺 同
17 三千院 同
18 東福寺 同

語 学

藤室保明 中国名言葉 朝日新聞社
 英中国名言葉 同
 英語学習逆引辞典 開文社出版
 中村一男編 英語反対語辞典 東京堂出版
 斉藤誠毅 やさしい英文法 研究社
 尾島雪枝 高校英語の基礎英文和訳の秘訣 北尾堂書店
 J.B.C. Barnard Examination English Macdonald and Evans
 Ronald Mackay English for Specific Purposes Longman

文 学

定本上田敏全集 9 教育出版センター
 アンナカレニーナ(下) 東海大学出版会
 奥の細道の旅 日本交通公社
 大岡信 アメリカ草枕 岩波書店
 磯田光一 永井荷風 講談社
 前田愛編 全集随ロー一葉 2 小説編 2 小学館
 同 4 評伝編 同
 渡辺淳一 遠き落日 上下 角川書店
 久保田正文 正岡子規その文学 講談社
 保田典重郎 天降言 文芸春秋
 遠藤周作文学全集
 1 青い小さな薔薇 白い人 新潮社
 2 海と薔薇 月光のドミナ 同
 3 火山 あまりに碧い空 同
 4 哀歌 影法師 同
 5 留学 ユリアとよぶ女 同
 6 沈黙 母なるもの 同
 7 死海のほとり ガリラヤの書 同
 8 黄金の国 メナム河の日本人 同
 9 イエスの生涯 サド伝 同
 10 カトリック作家の問題 宗教と文学 同
 11 牧歌 切支丹の星 同

読んでみませんか

070 新聞とは何か

(林三郎 PHP研究所)

暴露的ジャーナリズムや読者操縦のあれこれなど、新聞の矛盾と欺瞞も説き明かし、正しい読み方を教える。

210.6 怒濤の時代

(高野澄 徳間書店)

「獅子の時代」の背景を読む。

戊辰戦争以後、幾多の闘いの中で明治人は新国家を生み出すべく、どのように生き、死んだのか。

410.2 数学をつくった人々

(E.T.ベル 東京図書)

彼等はどんな家庭に生まれ、教育を受け、その才能はいつどのように芽生えてきたのか。

507.1 三倍の人生

(中松義郎 学習研究社)

発明や考察の数が2000件。ジャーナリズムで大きな反響を呼んだ、非常におもしろくためになる本。

833 英語学習逆引辞典

(郡司利男 開文社)

英語に強くなるには、まず単語をバッチリ。そのためには、この「逆引」で能率的に。不得意者に贈る。

913.6 遠き落日 上下

(渡辺淳一 角川書店)

「私は虚飾のない、なまの野口英世そのものを描きかけた。部分的に野口の偶像を破壊しはしたが……」

914.6 アメリカ草枕

(大岡信 岩波書店)

詩人の豊かな感想で捉えたその自然・都市・美術館そして人々——さまざまな出会いをのびやかな筆致で。